

2-(7) 社会科学系図書館に期待するもの

一橋大学附属図書館長

齋藤 修

はじめに

社会科学系といっても研究者のタイプは多様です。どのようなタイプの研究をしているユーザーかによって、図書館に期待するところは大きく異なるでしょう。各大学図書館が社会科学系の図書についてどのような品揃えをすべきかは、その大学の社会科学系教員の構成がどうなっているかによって変わるはずです。

私も社会科学系の研究者ですが、私個人の考えを語る前に、社会科学諸分野の多様性を、図書館の側からみてわかりやすい尺度でもって分類してみたいと思います。

そのうえで、私の体験から「社会科学系図書館に期待する」ところを述べ、右肩上りの時代が終わってしまった現在、図書館はどのようなことをすれば研究者/ユーザーの満足度がもっとも高くなるかを考える材料としていただけたらと思います。

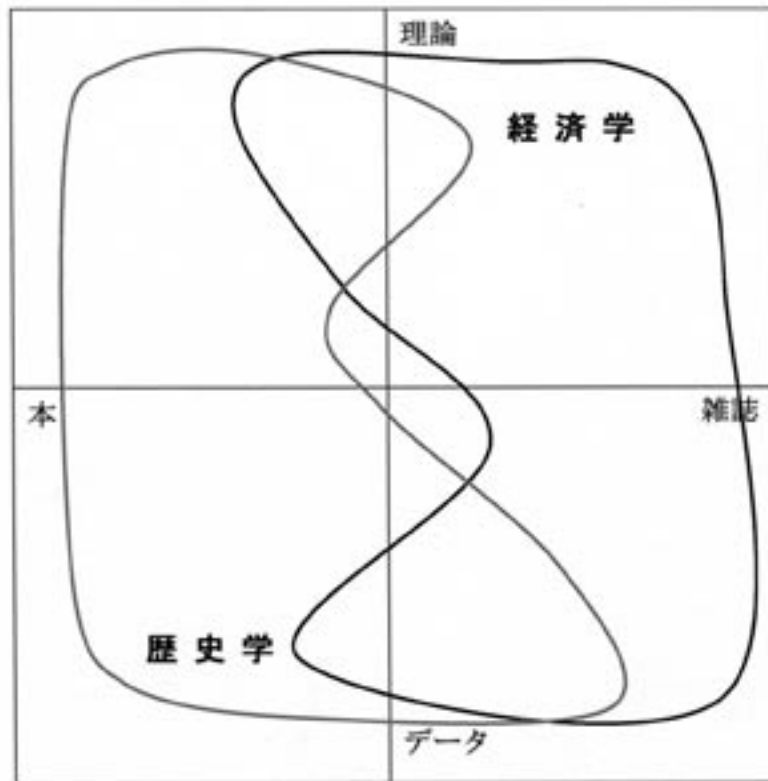
I 社会科学：その分類学

社会科学は多彩で多様、学部/研究科の数よりはるかに多くのタイプ分けができます。しかし、その多様さを次の二つの尺度で分類すると、図書館職員にとってはわかりやすいのではないかと思います。

- 本重視－雑誌重視
利用するのが本か雑誌かだけではなく、業績としても本が重視されるか雑誌論文が重視されるかも異なる
→ e-ジャーナル志向、電子化
図書館「中ぬき」化の危惧
- 資料（データ）志向－文献志向
資料（史料）あるいはさまざまな形態をとったデータ（たとえば統計）を研究の中心にすえるか、ひたすら文献を読み、考えるのか
→ 電子化への影響は複雑
 - 検索とブラウジング
 - オリジナルと機械可読型データベース

経済学と歴史学は両極端

しかも、それぞれの分野のなかがまた多様



II 私の図書館体験

次に、経済学系のなかでもっとも歴史学に近い研究者/ユーザーとしての、私個人の図書館体験を少しお話します。留学先での経験と、現在の大学におけるユーザーとしてです。

- University of Cambridge
University Library
History of Population and Social Structure
- 一橋大学
附属図書館
社会科学古典資料センター
イノベーション研究センター資料室
経済研究所資料室
社会科学統計情報研究センター（旧日本統計文献センター）

- 蔵書規模
- 本と雑誌
- 開架と閉架
- 閲覧と貸出し
- 一般書架と特殊資料
- 中央図書館（UL）とサブジェクト・ライブラリー

III データ論

図書館は雑誌と書籍を収集するところで、データを収集するのはアーカイブということになっています。しかし、独立のアーカイブをもっている大学は多くなく、しかも図書館が収集すべきものとアーカイブが収集すべきものの境界は明瞭ではありません。これからは、図書館も「データ」も積極的に収集する対象と考えたほうがよいように思います。

その存在形態

オリジナル

古文書

経営文書

マイクロ（個票）データ

書籍

政府刊行物（統計書等）

覆刻版

データベース化された資料

CD-ROM

科研費で作成されたデータベース

機関リポジトリで収集・公開

IV 期待するもの

今後、e-ジャーナルがあつて、他機関のウェブサイトからデータをダウンロードできれば十分だという社会科学者は増えるかもしれません。しかし、彼らが多数派となることはないでしょう。社会科学の多くの分野は、相変わらず冊子体の書籍とネットからは得られないタイプのデータを必要とするはずで

そのなかで、これからの社会科学系図書館は何をすべきか、私のようなユーザーからみた社会科学系図書館の努力目標を3つあげて、結びに代えたいと思います。

- 図書館のストックを活かす
増加率から、利用率を高める方向へ
- 図書館に来てもらう
ブラウジング
UL への集中と開架化
「個人研究費」の問題
- 専門性を高める
研究者にとって図書館は「教えてもらえるところ」
所在情報
データの氏索性
特別コレクション（文庫）の解説
例：一橋大学附属図書館所蔵から
「修学旅行報告書」
「メンガー文庫」
書誌情報
一味違った情報が貴重
例：『明治前期日本経済統計解題書誌』
「帝国死因統計」
サブジェクト・ライブラリアン
Cambridge での経験